手賀沼が海だった頃

NO. 3

地域の歴史や自然を皆で語ろう

2001・6・1

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報

新年度にむけて

「グループを新設。地域の歴史や自然について みんなで考え、企画し、活動したいですね」

会長・川上利男　顧問・鈴木英夫　司会・浦久淳子

会を設立して一年半余。四月十五日には第二回総会を開き、会計報告や事業報告を行った。さて、新年度。「歴史グループ」「自然環境グループ」を新たに設け、幅広い活動にチャレンジする。これまでの成果は、そして今年度の抱負は――役員会を代表して、会長と顧問に語ってもらった。

新組織図

事務局

歴史グループ
・講演会
・松ヶ崎城見学会
・絵馬復元　等

自然環境グループ
・企画中

＊両グループ共、メンバーが集った時点で正式決定

「松ヶ崎城の歴史的価値が認められてきました」

浦久　四月の総会で、本出版、講演会、ウォーキングイベントなど、昨年の事業が報告されました。会員であるなしにかかわらず多くの方がイベントに参加くださり、昨年度だけで述べ三百人を数えました。

川上　予想以上に大きな反響がありましたね。歴史を始め自分たちの住んでいる地域への関心が高く、積極的に参加してくれましたね。

鈴木　会の主要なテーマの松ヶ崎城については、この一年間で歴史的価値の評価がかなり上がってきたと思います。何人もの研究者に現地を踏査、また講演会で話していただいたのですが、我々が考えているよりも高い評価をされていました。先日発行された千葉歴史学会の学会誌の中でも、「都市化の著しい柏市の中で、このように松ヶ崎城が残されていること自体が『現代の奇跡』である」と紹介されています。

川上　ええ。発掘されていないので直接的な価値づけはできないけれど、傍証的なやり方で評価を得てきたと、私も思います。

「新組織。より広く、また企画から皆で考えていきたいですね」

浦久　さて、新年度です。これまでの歴史に加え、新たに「自然環境グループ」を設けることが総会で承認されました。どういった趣旨ですか。

川上　松ヶ崎城が含まれる地域が、歴史的価値だけでなく、環境面でも大切な位置を占めることがあるんです。手賀沼へ注ぐ大堀川とそれに沿う樹林は、大切な自然です。それらを併せて考えたい。

鈴木　その自然で思い出しました。大堀川が変わってきているのをご存知ですか。カワセミが棲息していると聞きましたし、カモも今年は百羽近くいたのではないでしょうか。利根川はかつてカモ猟で生きていた時代がありましたが、自然は明らかに戻ってきています。地域にとって、とても重要ですよね。

川上　環境には、いろいろな側面があります。歴史などの文化的環境、植生などの自然環境――大きな意味で地域の環境を考えていければいいですね。その一分野として「自然環境グループ」を会の活動に取り入れたわけです。それと、もう一つ。一般会員の方にも企画段階から関わってもらいたいという希望があります。

浦久　はい。私は会報の作成をしているので、時折会員の方からご意見を頂きます。ある時、「横のコミュニケーションがほしい」と言われたことがあります。そういえば、企画する側と参加する側、講演する側と聴く側といった図式になりがちだと思いました。

川上　これまでは役員会で企画やイベントの進行をしてきましたので、一般の会員の方は受身にならざるをえなかった。さまざまな分野・職業の方がいらっしゃるはずです。歴史について、自然について、それぞれの知識や経験を生かしながら、ワイワイガヤガヤとやれれば楽しいですね。

「若い会員が入会してくれています」

浦久　昨年度、とても嬉しいことがありました。十代の会員が何人も入会してくれたんですね。これはこの会の特徴といえるのではないでしょうか。中には、「地域の歴史を知りたい」といろいろな所に問い合せて、入会してくれた生徒もいました。

鈴木　そうですね。これは私の個人的な夢ですが、市民が自由に参加できる発掘調査があり、高校生や中学生が参加してくれればいいですね。そうすると、考古学や歴史学に見識を持つ市民が育ちます。十年後、それが柏の文化の力となり花が咲き、柏の文化的魅力の一つになると思います。

＊グループ分けについての詳細は六面

松ヶ崎レポート

NO 2

鈴木英夫

絵馬と水神宮・呼塚の常夜灯（2）

〔鈴木英夫さん〕

前回に引き続き、松ヶ崎不動尊に奉納された絵馬のいわゆる「風景図」に呼塚の常夜灯が描かれていない問題について取り上げます。

「風景図」が不動尊を中心にすえて水戸街道・手賀沼の情景・景観を忠実に表現した絵画であることは述べました。ついでにもう一点、その推測を裏付けることをあげておきます。昨年の夏に「風景図」と同じく不動尊の絵馬であるいわゆる「参拝図」を見比べていたところ、石段の真下の「茶屋」らしき建物の二階の窓につるしてある提灯の色がいずれも赤なのです。「風景図」には他の建物も描かれていますが、提灯が描かれているのはこの「茶屋」だけですから、この絵師は想像で提灯を配置したわけではありません。

さて、本題に戻ります。解決策の一つはこの絵馬の作成年代を常夜灯設置以前の時代、江戸時代、つまり一八六五年の幕末期に設定することです。当初、私もそのように考えてみました。しかし、二〇〇〇年に当会主催で二つの絵馬の絵解きをスタジオWUUで行ったときに、水戸街道を下る人の中に人力車らしき絵があることが指摘されました。

私もその解釈に今はほぼ賛成しています。さらには手賀沼の一艘の船には日傘をさしているように見える女性が描かれています。

日傘はやはりヨーロッパの風俗の影響だと思うのです（正確なことは分かりません。日本への伝来についてご存知の方があればぜひご教示ください）。そうなると、「風景図」の製作年代を常夜灯設置以前にまでさかのぼらせるは、やはり無理があります。絵馬の風俗が江戸時代であれば、幕府が非公認の河岸であった呼塚の河岸の象徴であった常夜灯を描くことをはばかったとみることが可能ですが、やはり人力車と日傘の存在がそれを許しません。

……

専攻は日韓古代史。著書に「古代の倭国と朝鮮諸国」（青木書店）、編・共著に「歴史に見る日本と韓国・朝鮮」（明石書店）などがある。

呼塚の常夜灯。１８６５年に呼塚を中心に近隣１０カ村の人々により建てられた。現在は北柏橋の隣接地に移転。

活動記録

２００１年１月～４月

講演会「戦国時代の東葛・柏地域―北条・上杉の争いと小金城主高城氏」

平成十三年一月二十八日

松戸市立博物館学芸員の中山文人さんが講師。前日からの雪で交通が心配されたが、無事開催。「千五百年代の古文書から高城氏に関わるものを発見、よく分析されていると思いました。小金がなぜ中心なのか、わかりました」「シリーズでお願いしたい」「今度は古戦場をテーマにしてほしい」などの感想が寄せられた。参加者は五十三人。（スタジオWUU）

第二回総会・講演会「水辺の城を考える―柏・松ヶ崎城の性格を知るために」・懇親会

平成十三年四月十五日

総会 平成十二年度の決算・事業報告、平成十三年度の予算・事業計画が報告された。参加者は二十七人。

講演会 元柏市史編さん委員会参与・佐脇敬一郎さんが講師。内容は四面に掲載。参加者四十五人。

懇親会 講師の佐脇さんもまじえて、会員・当日参加者二十五人で歓談。（スタジオWUU）

第二回総会から

＊＊昨年度事業＊＊

○ 講演会

「房総の中世城館跡と松ヶ崎城跡」（講師・遠山成一さん）、「松ヶ崎のあゆみ―江戸時代以後の松ヶ崎城址」（講師・鈴木英夫さん）／平成十二年七月二日、スタジオWUU

「手賀沼が海だった頃」（講師・鈴木英夫さん）／平成十二年十一月二十五日

さわやか千葉県民プラザ

「戦国時代の東葛・柏地域―北条・上杉の争いと小金城主高城氏」（講師・中山文人さん）／平成十三年一月二十八日、スタジオWUU

○本出版

「手賀沼が海だった頃―松ヶ崎城と中世の柏北域」／平成十二年七月二日

○ウォーキングイベント

「古代東海道を歩こう！」（講師・高田淳さん）／平成十二年十月十五日／十一月十二日

○歴史講座

「松ヶ崎城址と松ヶ崎地区のあゆみ」（講師・鈴木英夫さん）、平成十二年七月二十九日／八月五日／八月十九日／九月二日、松葉カルチャースペース

○囲む会

「木原啓吉さんを囲む会」平成十二年五月十一日、スタジオWUU

「岩瀬徹さんを囲む会」平成十二年十月十九日、スタジオWUU

「牛田秀一さんを囲む会」平成十二年十二月二日、布施弁天東海寺

○松ヶ崎城踏査

総南文化財センター・津田芳男さん、平成十二年五月二十二日

東京国立文化財研究所名誉研究員・伊藤延男さん、平成十二年八月二十五日

○会報発行

平成十二年九月一日、十二月二十四日

＊＊今年度事業＊＊

六面に掲載。

寄稿

手賀沼・大堀川・大津川の地形学的解析（1）

古代官道、中世相馬御厨の研究と関わって

長沼映夫

はじめに

近年、手賀沼及びその周辺地域における古代・中世の研究の発展は目覚しいものがある。とりわけ、その古代官道や水運の発達については斬新な説が出され、眼を見張らされたが、文字資料が乏しく、新たなる史料の発見が期待できない古代・中世の研究においては現代から近代・近世を経て中世に遡らせて行く方法や考古学的方法に依拠することなしには、今までの諸説をより確かなものにすることは不可能であろう。そして、この場合、要求されることは現地に行って、まず地形と対峙すること、さらには今までの歴史学・歴史地理学で殆ど顧みられなかった低地の地下構造や成因、つまりは地質学の援用を受けることが今後、大切になってくるであろう。

このような訳で、あえて単なる高低と言う表面的な地形（地勢）だけでなく、地形学と学の字を加えたのであるが、この分野の研究は未だ不十分であり、私個人としても、そんなに深くやっている訳ではないので、そのことだけを述べるのではなく、目に見える地形、つまり地勢面の分析も積極的に行いたい。

ただ、古代官道と言い、相馬の御厨と言い、それは歴史の事象であるから、社会・経済的側面から事の是非を論じなくてはならないのも、もちろんであるが、レポートの趣旨から言って、その面（社会・経済面）からのアプローチは、地名などを除いては必要最小限に留めたい。

問題の所在

大分、前置きが長くなったが、ここで最初に今私の頭の中にある「古代官道・中世相馬御厨と地形・地質の問題」について、その全てを思いつくままに列記してみたい。そして、その一つひとつの検討は今後何回かに分けて書いて行きたいと思うが、何せ未開拓な分野でもあるので、いままでの研究と全く違ったことを述べるかも知れず、その節はいろいろとご批判をいただくだけでなく、新たなる問題の指摘、仮説を大胆に提起していただきたい。

最初は「手賀沼の湖底」の問題で、ごく一部の専門的な農・漁業関係者を除いて殆どの方が、手賀沼の底は一様と考えているが、その左岸と右岸には大きな構造的相違があり、右岸沼南側には長く更新世テラス「台地」が埋もれ、所によってはヘドロなどに覆われず、突出しているそうである。これに対して左岸我孫子側は深い谷が刻まれていてそこを沖積層が埋めていることが明らかになっている。

この問題は船の水路問題、古代水田の問題、さらには相馬御厨の四至（南限、ただし手賀沼に境界があったとすればの話であるが）等境界の問題とも深く関わってくる。また、この問題は篠籠田の谷へと続きその成因、大堀川の成因・性格そして四至（南限）との関わりへとつながって行く。そして、この手賀沼・坂川構造線（地溝帯）は本地域内のもっとも目立つ地形で、そこを通過する交通路の問題と谷内部の水田開発と手賀沼の内部への進入の問題と深く関わる、その研究のためには、単に断層によって低地が形成され、そこに海が出たり入ったり程度の地形学ではなんら役に立たない。要するにもっと細かい微地形・小地形の解析が大切だと言うことである。

この私の主張を、本地域の例で具体的に一つ言えば、高田淳氏の研究で明らかにされた茜津（あかねつ・柏市藤心）の津（港）の正確な位置と構造（規模・機能）の解析には、それらしき場所（大字藤心小字津戸口・大宮戸＝大宮津）を挟む二本の谷津に、まず眼を向けねばならないと言うことである。

焼けた絵馬を復元しよう！

当会、歴史グループで取り組み

明治時代初めに描かれた貴重な絵馬を復元しようー新年度の事業の一つとして、当会で企画、取り組むことが決まった。

絵馬とは、松ヶ崎不動尊に奉納されていた「不動尊風景図」だ。大きさは縦約八十センチメートル、横約百六十六センチメートル。旅人が行き交う水戸街道、帆掛け舟が浮かぶ手賀沼、のぼりが立って賑わう松ヶ崎不動尊などが詳細に描かれた鳥瞰図となっている。古い地図や現在も残る祠と比較すると、正確に描かれていることが分かり、貴重な史料でもあるという。

その「不動尊風景図」が焼けたのは、平成八年六月。不動堂や奉納された他の絵馬とともに失火で全焼したが、柏市教育委員会が調査のため写真に残していた。当会でそのネガを借り受け、パソコンで再現しながら、これまで松ヶ崎近辺の歴史を検証してきた。

「そんな貴重な絵馬を、もう一度掲げてみたい」。役員会で意見が出て、事業の一つとして立ち上げることが決まったのが三月。「何年もかかるかもしれないが、ぜひ復元したい。正確に再現したもの、子供たちが描いたもの。みんなでいろいろ企画しながら取り組めれば」と思いは広がる。

当初は、四月から新設された「歴史グループ」内で取り組む予定。

焼失した、貴重な「不動尊風景図」。ネガは市教委所蔵

佐脇敬一郎さん・講演記録（要旨）

『水辺の城を考える―柏・松ヶ崎城の性格を知るために』

平成13年4月15日　スタジオWUU

佐脇さんは『柏市史　原始・古代・中世編』の中世の執筆者の一人。講演会当日は、城の縄張り図・古文書など多くの史料を駆使しての話だったが、紙面の都合で史料紹介は割愛した。「こちらでは、西国の城に触れることが少ないかも」と西国の話も取り入れた講演だった。

● 中世の城の面白さ

城の縄張りや構造は時代と共に変わるという考え方があり、大筋ではそう言える。しかし実際の城跡を見ると更に複雑で、同時期に周囲のさまざまな城が使われている。廃城・再興を繰り返し、そのため城郭の使用時期・それに至る過程・使用状況・敵味方の城の配置とそれぞれの位置関係・距離が、城の縄張りや構造を考える上で必要不可欠。そこが中世の城の面白さで、構造の変化から歴史的なものを読み取ることができ、研究が進めば、使用状況を考察できるようになると思う。領国支配や郷村のあり方、流通にまで影響を与えていたと考えられる。

● 近辺の小型の城――松ヶ崎・増尾・根戸

松ヶ崎城の特徴の一つは、台地の先に偏っていること。なぜ寄って造られたか、全体的に造らなかったのか。場所的にも必要だから構築されたわけで、城を見る時のポイントの一つ。また土塁に「横矢」と呼ばれる張り出し部分がある。張り出すことで二方向からの攻撃が可能となる。横矢は一五世紀の城にも見られるが、小型の城ではもっと後と考えられる。その他、郭の中の傾斜も特徴で、斜めになってはっきりしない土塁が疑問として残る。

増尾城は、小型でもしっかり造られている方で、土塁の一部分に「出枡型」と呼ばれる、やはり張り出して厚みを持つ造りなどがある。張り出しは千葉県内でよく使われ、北柏の根戸城にもある。根戸城は、中の郭と外の郭の若干のズレが指摘でき、これも二方向からの攻撃を可能にしている。この地域の城は小さいけれどよく考えられ、軍事的に力を入れて造られたものが多い。

以上の三城の築城時期、使用状況は不明。周辺ではないが、使用状況が分かる小型の城に上野（こうづけ）、現在の群馬県勢多郡の真壁城がある。この城は本城の厩橋城とその北方の樽城の間に位置する。この二城の交通を分断し、本城の包囲網を確立する一環として使われた。

● 水辺の城のいろいろ

松ヶ崎城の大きな特徴が「水辺の城」であること。全国の水辺の城の性格を紹介する。

［水軍の拠点となった城］ 下田城（静岡県下田市）と長浜城（静岡県沼津市）を例にあげる。どちらも後北条の城で、城のできる前の下田の地形は、尾根が平地を囲んでいた。城は尾根を土塁に見立て、尾根の片側に堀を作った構造。しかし、多くの水軍の拠点となる城は、こうした城壁で港を守るような立派なものはあまりなく、殆どは小さく、周囲に舟をかける所がある程度だ。長浜城は、本城の韮山城の城門の役割を果たした。韮山城とは約七・五キロメートルの距離で、守備隊の前線として機能。ちなみに根戸城と小金城は八キロくらいある。

［水辺の城と水運との関わり］ 重要拠点の城へ、水上交通を利用して建築用材を運んだ例をあげる。例はそこそこあるが、毛利元就の書状や後北条の朱印状を紹介する。城の構築・改築など大量な物資を輸送する場合、船で運んだことが史料から確認できる。下総でも小金城や関宿城のように有力な城は水辺にあるが、防衛に加え、建築用材などを大量に運ぶことができる理由がある。

［水上補給の拠点となった城］ 兵糧などを陸の城へ運ぶ途中、水運を利用するため中継点・補給拠点となったのが、伯耆の淀江城（鳥取県西伯郡）。毛利元就が尼子方を攻める時に内陸の城の兵糧が焼け、日本海を船で淀江城に輸送した後、陸伝いに内陸の城へと運んだことが、永禄七年と思われる文書に残っている。

［監視所の役割を果たした城］ 出雲の加賀城（島根県八東郡）の例。毛利が尼子方を攻め、この地域を支配していくが、今日話す文書は尼子方がすでに敗退した天正二年。その時期になぜ加賀城が必要だったかというと、隠岐の島から出雲本土への渡り口だったため。隠岐の島に尼子の残党が残り、警戒が必要とされた。もう一つ、この加賀城は階段状の平場があるだけの造りで、何度も城将が毛利に普請を要請した城である。戦いの最終段階で人足が足らず、粗末だったと思われるが、戦国時代の城が全て「城塀・柵で囲まれ、逆茂木がひかれ、矢倉台が建つ」という形でなかったことが確認できる。

また、上野（こうづけ）の新田郡に、利根川べりと思われる川辺を警戒するために、まず寄居という砦を作り、守備隊を置いたことが分かる制札が残っている。水軍・水上交通とは関係なく、船があればどんどん敵が入ってくるので、監視するために置かれた施設だ。

● 松ヶ崎城の今後の課題

古文書が残っていなければ、小さな城は無視されがちだが、加賀城は小型でも、本土への渡り口を押さえるという、非常に重要な役割を果たしていた。古文書を中心に城を見ると、重要でない城はないと言える。松ヶ崎城の場合は、常陸から下総にかけての水辺の城の分布、使用状況を明らかにしていくことが必要ではないか。また補給も視野に入れ、内陸の城へも目を向ける。そういう関連性を考えた、城郭配置の検討が大切だ。

また、地名「竹之台」が残り、城館「館」との関係が考えられる（本「手賀沼が海だった頃」参照）。中世の城で「竹の内」「堀の内」など城郭に関連すると言われている地名が付いている城は、あるようでそんなにない。現在城跡が残る部分に館が建っていたとの考え方もできるが、要害とは別に館があったとも考えられる。松ヶ崎城のように、「館」地名と水辺の城がミックスされて残っている例は、非常に少なく、明らかになれば貴重だ。

寄付、有難うございました

会の活動を知った柏中央高校二年生のある生徒から、硬貨がたくさん詰まった貯金箱の寄付があった。届けられた金額は三千百二十四円、入れ物はディズニーのくまのプーさん。寄付と共に届いた気持ちが嬉しくて、役員で大切に保管している。そして、プーさんの顔を見ながら、今も考えている。若い世代に伝えられるものは何だろうかと。

使い途は今後の課題とします。有難うございました。

大堀川がきれいにカワセミ・サギ・カモが戻ってきた

大堀川にカワセミ・サギが姿を現し、今冬には例年より多くのコガモも、のどかに暮していた。教えてくれたのは、「大堀川の水辺をきれいにする会」の会長・寺尾直宏さん。

「カワセミは、背中が鮮やかなブルーで、胸がだいだい色。美しい鳥で『飛ぶ宝石』という別名もある程。水のきれいな所に住む小魚をエサにし、柏中央高校の裏手から高田あたりでよく見られます。

サギも、やはり水中の小魚やザリガニなどをエサにし、大堀川のかなり上流まで姿を見せるようになりました。大堀川の水がかなりきれいになってきた証拠です」と寺尾さん。

また、今冬には冬の渡り鳥、コガモも多く渡ってきた。人のいない静かな岸にくるというコガモ、鑑賞する時はお静かに。

真っ白なサギも見られる。菅谷孝之さん撮影

けやき通り

〈 石戸　孝行 〉

自称「旅士」の名刺を持ち歩いてかれこれ七年になる。魚屋の息子に生まれた私は親父の仕事を何の抵抗も無く継ぐもんだと思っていたので、高校時代も就職組に籍を置いて、卒業できれば良い、それだけの毎日だったように思える。

縁あって、スーパーマーケットを経営することになってみると、扱い商品をある程度知らなければならないことに気が付いた。昨今はTVや雑誌で私達以上に情報が入る時代になった。

「みの」何とかの番組を見た視聴者が、商品名を忘れて、「今テレビでやっている品物は何処の棚にありますか？」という笑い話が本当にあった。

仕事上、世界から商品を集めるとなると、成分表も大事だが、それより「なぜ、keihokuで扱わなければならないか」が問題になる。儲かれば良い、よその店で売っているから扱う、などという時代はとうに過ぎている。

そんな時、自称「旅士」は産地に向かい、なぜその商品がこの地域に根付いたのか、その地域で無ければならない必然性を求めに出向く。空気や水の違いにもこだわる。フランスに行ったとき、八十年先に商品になるという、りんごから造るカルバドスのメーカーにお邪魔した。当然、自分達の時代にはその酒は飲めない。そんな気の遠くなる商品を造るとなると、八十年先はどう世の中が変わって、どうあってほしいのか、などと思うのは当然である。自分達の町を愛し、地域と関わって行かねば、八十年先は望めない。

松ヶ崎城も交通、社会環境、いろいろな要素が絡み合って、あるべくしてあった。その松ヶ崎城も時代と共に移り変わって、現在がある。先代達の歩んだ道のりを学ぶことによって、カルバドスのメーカーのように八十年先（孫子の時代）はどうあって欲しいのかなどと、この会に参加させていただいて、つくづく思う。

学ぶことでロマンが湧く。旅士の「片手にロマン、片手にソロバン」、なぜか一致する。

柏北域 史跡ウォッチング（NO 3）

柏市遊歩会主宰　赤間榮太郎

船戸不動堂の底見ずの池

草木も眠る丑三つ刻、寄り合い酒に時を忘れた村人が二人、静寂な闇に閉ざされた樹林の細道を、ヒタヒタと響く自分の足音に追われ、恐怖と緊張で弾けそうな胸を押さえ、急ぎ足で不動堂前まで来ました。

パチャッ、パチャッ。

「おい、水の音だ」。

昔から枯れた事がない不動堂の底見ずの池で、何やら怪しげな光がボーッと二筋、戯れるようにうごめいています。怖いもの見たさに恐る恐る近づいた二人は、思わずワッと叫びそうになり、慌てて口を押さえました。

七色に綾なす池の水、金色に輝く蛇身をからませた大蛇が二匹、身をくねらせて愛を語らっています。

いつ家に帰ったか夢中でしたが、「祟りがあっては」なんねぇ、昨夜の事は絶対内緒だ」「そうすべぇ」。

内緒ごとは内緒にならないもので、印旛沼の主が、地下水道を通ってこの池の主に逢いに来たのだと、尾ひれの付いた怪異談が生まれて大評判になりました。

彩色された金色の目が、夜目にも怪しく池面に光っていたという倶利伽羅不動像も昔日の面影はなく、苔むした姿を枯れ果てた小さな池に曝しています。

船戸は昔から水陸の要衝で、現代の怪物・常磐高速道が南西から北東に絶え間なく騒音を撒き散らし、常磐新線も決まって何かと騒がしい不動堂北に、曾ては船戸陣屋があって田中藩政を支え、その北に船戸天満宮が鎮座しております。

不動堂背後の丘に建つ、水仙の花咲く一本杉善哉庵には、檀家の頼みで住み着き、静かに去った尼僧伝説が残り、歴代船戸代官の墓が並びます。ここから少し西に、船戸おびしゃの船戸会館や医王寺があります。

昔話の残る倶利伽羅不動像

7月8日（日）講演予定
「手賀沼とその周辺の歴史 -江戸時代から現代まで-」

柏市史資料編や柏市史年表作成で中心的役割を果たすなど、柏の歴史に詳しい、元柏市図書館館長・大関隆次さんを講師に招き、講演会を開く。テーマは「手賀沼とその周辺の歴史―江戸時代から現代まで―」。

「手賀沼はかつて豊穣な水辺でした。それが汚濁ワースト1となりましたが、今また清浄な流れを取り戻しつつあります。時代とともに、その手賀沼がどのように変わったか、また周辺の村々はかつてはどのような姿だったか。近世文書の話などもおりまぜ、現代までを話します」と大関さん。講演会の詳細はつぎの通り。

▽日時　七月八日（日）午後六時半～（講演後、懇親会を開きます。希望者のみ）
▽場所　柏駅東口から徒歩2分、イトーヨーカドー前、プールドゥ5階、スタジオWU
▽会費　一般千円、会員五百円　懇親会二千円▽問合せ　電話0471・48・1189　青山さん

会からのお知らせ

＊＊第二回総会から＊＊

▽新たにグループを設置しました。希望のグループのある会員の方は、事務局までお知らせください。

「歴史グループ」「自然環境グループ」を作りました。どのように活動するかは、それぞれのグループで考えていきたいと思います。「一つに所属」「どちらにも所属」「どちらでもない」、どのような形でも結構です。希望のグループのある方は、下記事務局までお知らせください。

▽今年度の事業計画

今年度は次のようなイベントを行う予定です。「自然環境グループ」は企画中で、現在決まっているのは「歴史グループ」のみです。

① 講演会
② 松ヶ崎城現地見学会（年二回程度）
③ 周辺城址の見学会
④ ウォーキングイベント「古代東海道を歩こう」
⑤ 「焼けた絵馬を復元しよう！―明治初めの風景を再び」（詳細は三面に掲載）

▽会費納入をお願いします

新年度になりました。会費は据え置きで、一年間二千円。左記振込先まで、お振込みください。ご支援、よろしくお願いいたします。

（振込先）千葉銀行柏支店（NO・008）普通預金3461475（手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会　伊江有可里）

＊＊その他＊＊

▽　当会の自己紹介

平成十一年九月に発足した、市民有志の会です。本出版や講演会・ウォーキングイベントを開催してきました。年度は四月から翌年三月、総会は基本的に四月。会長、副会長を含む十三人で役員会を組織し、企画運営しています。

▽　会員募集　地域の歴史や自然を楽しみながら考えていきたいと活動している会です。会費は年間二千円。入会いただくと、会報（年三回発行予定）とイベント案内を郵送いたします。

入会は随時受付け。郵便番号・ご住所・電話番号・ファックス番号・お名前を、会事務局までハガキ、ファックス、電話のいずれかでお知らせください。

▽本「手賀沼が海だった頃―松ヶ崎城と中世の柏北域」販売中

平成十一年六月に開催した歴史シンポジウムの記録を中心にした内容。詳しくは下欄の情報広場に。千五百円

事務局（入会等問合せ・希望グループの受付け）
〒277―0835　柏市松ヶ崎415―5，1―206）
北紘子　TEL・FAX　0471・31・8879

会計（会費等問合せ）
松平信子　TEL　0471・33・6438

会報作成　浦久淳子　TEL・FAX　0471・55・2351

編集部より

三面の「手賀沼・大堀川・大津川の地形学的解析」は今後数回の予定で連載します。文中の「相馬御厨」については本「手賀沼が海だった頃」に、「古代官道」については会報一号や「柏市史　原始・古代・中世編」に掲っています。ご参照下さい。

情報広場

『手賀沼が海だった頃―松ヶ崎城と中世の柏北域』（当会）を会・書店で販売中

一昨年当会で開催した歴史シンポジウム。その記録を中心に松ヶ崎城の説明、松ヶ崎周辺地域の歴史などを分かりやすくまとめた内容。シンポジウムの章には、県史執筆員・県立中央博物館上席研究員などの「松ヶ崎城の特徴とその役割」「香取の海の交通」「相馬御厨と柏北域」「戦国時代の柏北域」が収録されている。「歴史がない」と言われてきた柏だが、交通や流通という視点でとらえると、非常に重要な位置にあることが浮かぶ。新しい柏の歴史発見に。A五判百五十六ページ、千五百円▽たけしま出版　℡04 71・58・4512

新刊『地域の歴史を求めて―葛西城とその周辺―』（葛飾区郷土と天文の博物館編）

同館の地域史フォーラム四回目の記録。テーマは室町時代中頃に葛西地域の要として築城された葛西城で、葛西城や周辺地域の政治状況などが、最新の研究成果をもとに検討されている。「葛西城とその周辺」「室町・戦国時代の東国社会」「上杉領国と葛西城」「東葛地域と葛西」「小田原北条氏と葛西城」「発掘された葛西城」「葛飾郡の西と東」の報告が収録。新書判、二百七十ページ、千五百円。▽たけしま出版℡0471・58・4512

柴田弘武さんが北野道彦賞を受賞

歴史研究家・柴田弘武さんが、第十回北野道彦賞を受賞した。同賞は東葛地域の文化向上に貢献した個人・団体に毎年贈られる。柴田さんは主要執筆メンバーの一人として「我孫子市史研究」に論文を執筆、傍らで東国古代史を中心とした研究・著作活動を続けている。委員長を務めた郷土教育全国協議会、えみし学会、湖北座会など、多方面で活躍中。日本ペンクラブ会員。著書に「東国の古代―産鉄族ナオ氏の軌跡」「常陸国風土記をゆく」（窟書房）、「風と火の古代史―よみがえる産鉄民」（彩流社）他、多数。